

下嶋 哲也

しもじま てつや / 言語聴覚士を志す学生の指導育成を行う傍ら、言語聴覚士として病院で臨床業務に携わる。紙芝居実演を子どもの臨床や入学試験に取り入れるなど、紙芝居とリハビリテーション教育・臨床の接点を模索中。

ひろがる!
ひろがる!
紙しばい

12

私は埼玉県所沢市の言語聴覚士養成校「ことばのリハビリ職の学校」といえば分かりやすいでしょうかで大卒のうちの教育をしつつ、週の半分ほどは隣の病院でことばの遅れのあるお子さんの支援や発音の練習などの臨床をしています。そんな私と、紙芝居の出会いは図書館でした。わが子に演じたことをきっかけに面白さに目覚め、多くの紙芝居を演じるうちに、作品の質や目的もさまざまであることがわかってきました。

演じはじめて一年くらい経ったある日、仕事の中で「ことばのリハビリの仕事をする人によい実技演習の課題はないか？」を考え探していたこと、紙芝居が「パチッ」とつながり、紙芝居をカリキュラムに入れることを思いつきました。なぜかという、紙芝居が「伝える場」をつくること。脚本に日本語の美しさや強さがあること。それを自分の肉声と表現力で伝える難しさと愉しさ。思い切った演じることで、聴き手と場を共有できるライブ感。人と人が心を一緒に動かす瞬間があること……。どれもが、言語聴覚士という「ことばとコミュニケーションの専門家」にとって大切なものばかりじゃないか！ と思ったからです。

さっそく調べて重心社さんに講師の派遣をお願いし、トントンとすすみました。同僚たちも最初は半信半疑でしたが、実

ことばのリハビリと紙芝居



皆で演じあうことで、よい字びになります。

際に演じる場面や講義を聞くうちに、きわめて臨床と共通点が多いことを知り、みな「紙芝居はすごい」と納得。思いつきだけで終わらなくて良かった……。

紙芝居は、まず「観客はきくと私の演じる作品を楽しんでくれる」という観客を信じるころ、「きくと人前でも私らしく演じられる」という自分を信じるころ、そして「すべれた作品はそれ自体が伝える力をもっている」という作品を信じるころ……の三つの「信じるころ」があるかどうかを、自分に問いかけてくるメディアではないでしょうか。

紙芝居の演じられる場には、「信じるころ」「目には見えないもの」が中心にあるように思います。信じるころがあればあるほど、場にエネルギーが満ちていき、それが共感とコミュニケーションを生み出しているのだと私は思っています。

学生（ちなみに若い女性が多い）も、実際に演じてみて伝えることの難しさと楽しさを体験し、奥深さに少しずつ触れているように思います。クラスで誰が何を演じたかを、数年後になってもお互いに覚えていたことも多いです。「思い出」にまでなるなんて、やっぱり紙芝居はすごい！

今の時代に、信じるころを！
今の時代に、もっと紙芝居を！